

34. 季節Ⅱ（梅雨）

季節は初夏に入ります。六月は梅雨の季節でなんとなく 湿っぽさを感じます。日本にやってきた外国人がこの湿度の高さに悲鳴をあげる季節です。

さみだれを

あつめてはやし

最上川（芭蕉・奥の細道）

梅雨は6月なのに、なんで五月雨なんだ？と文句を言わないで下さい。芭蕉は江戸時代の人、現在使われている暦は太陽暦、明治5年に制定されたもので、それまでは陰暦を使用していたのです。太陽を1周するのが365日、これが1年で陽暦（太陽暦）。月が地球を1周するのを1単位（1月）として12周を1年（354日）、これが陰暦（月齢）。従って陰暦は19年の間に7回の閏年（13ヶ月、文月が2回）を制定して陽暦と調整し、其の調整には二十四節気、七十二侯の設定とか涙ぐましい努力をしております。



ですから明治維新以前の事件、事象の記録の日付をそのまま太陽暦に直すと季節が合わない現象が多々ありますが、史学の研究者はどの程度調整しているのでしょうか？

世界にはいろいろな暦があり、現在でも数多く使われておりますが、私が働いていた中東もアラビヤ暦、イスラム暦があり、その暦に従って生活をしておりなら不自由はありません。ですからラマダンの月は陽暦でみると毎年異なる月に行われます。

さて、陽暦の2月初旬が陰暦の正月になりますから、33日位ずれており、ですから年賀状に「初春のお慶びを申し上げます」と習慣として書いて平然としておりますが、陽暦1月1日は真冬であることは子供でも承知していることです。これは陰暦の習慣で2月4日が立春だから初春なのであって、これを陽暦に当て嵌めているのは違和感があります。

ですから陽暦の6月は陰暦の5月ですから、五月雨が梅雨であるのは間違いありません。

しかし、さみだれを五月雨の漢字を当て嵌めるのには納得出来ません。

‘サミダレ’を分析してみましょう。‘サ’は早苗の短縮語で稲の接頭語。‘ミ’は水の短縮語。‘ダレ’は落ちる意味の‘垂れ’の造語です。

従って‘サミダレ’は田植えのために天が与える恵みの雨を意味します。古来我が国の経済基盤は稲作であって、江戸時代の各地方の大名の勢力は石高、つまり米の収入の割合を石（1石=10斗=100升）で表わしたもので、武士の給与も全て米で計算しています。米の生産こそが最優先の産業だったので。

その当時は灌漑施設も貧弱であり、田植え時期に降雨は絶対的な必要事項であって、切なる願いが

‘サミダレ’に凝縮しているのです。

更に中国から‘梅雨’という言葉が入ってきました。中国での意味は、揚子江流域で梅が熟す頃に降る雨なのでという説と、じめじめしてカビが生え易くなることから黴雨（バイウ）と云ったとの説があり定かではありません。

ではこの梅雨を「ツユ」と読んだのは何故か？「日本歳時記」（1689）の記載に「これを梅雨（ツユ）と名づく」とあるので、この書がでたのが五代将軍綱吉の元禄時代なので、それ以降段々と‘ツユ’という言葉が定着してきたようです。芭蕉もこの時代の人で江戸文化が開いたのもこの頃です。では梅雨をツユと読ませたのか？

「露」なのか？熟して潰れるという意味で「潰ゆ」（ツイユ・ツユ）からきているのだとの説がありますがこれまた定かではありません。

近年には‘サミダレ’を五月雨という当て字を造語し、梅雨をツユとして、入梅なる造語もできて、五月に降る雨がサミダレになり、六月に降る雨が梅雨（ツユ）と定着してしまいました。

梅雨という言葉が中国で使われていたのがそのまま輸入され定着したのは事実ですから、梅雨という雨の季節は我が国独特の事象ではなく、中国揚子江沿岸地方、朝鮮半島、台湾を含む東アジアの広い範囲に降る雨の総称になります。ですから梅雨は「BAIU」として国際気象用語に登録されています。

ではここで今流行のクイズで誰でも知っていることですが「同じ字をアメ・サメ・ダレとグレて詠み」、雨の字がこれだけ変化する、日本語はまさに繊細な情感の表現です。1年中雨が降り、それも季節によって降る風情が全く異なるからこそ生まれた言葉でしょう。乾季と雨季がはっきりと分かれていたり、スコールだけだったり、乾燥地帯だったり、世界中の事象に比べなんと恵まれた環境にあることか天と環境に感謝します。



入梅

次は梅雨を気象学的に捉えてみましょう。晩春から初夏にかけて雨や曇の日が多く現れる事象の総称が梅雨で、中国大陸東沿岸地方から我が国の東海上にかけて前線が長期停滞し、日本、中国の一部、韓国、台湾等東アジアにみられる雨の季節です。

暦の上では「太陽が黄経 80 度を通過する日（6月 11 日）頃を入梅」となっておりますが、気象学的にみた梅雨入りは、停滞前線（梅雨前線）が我が国南岸沖に停滞し始めた時をもって‘ツユ入り’としています。従って沖縄から始まって徐々に北上してくる訳ですから、その年や地方によって梅雨入りが異なるのは当然です。

五月中旬から下旬の第一期は、南西諸島に梅雨前線が現れて、沖縄地方が梅雨に入りますが、全国的には一時的にグズついた天気になることから「はしりの梅雨」と呼ばれています。

六月上旬から中旬にかけての第二期は梅雨前線が本州南部沿岸に停滞するようになり西日本から徐々に東日本へ向けて梅雨入りが進み広い範囲で梅雨の季節に入ります。

北海道はオホーツク海高気圧が張り出しすので梅雨が無いと云われておりますが、年によっては一時的に梅雨前線が北上して停滞することがあり、全くないとは言いきれず「蝦夷梅雨」という言葉もあります。

六月中旬から下旬にかけてのこの時期には「梅雨の中休み」晴天が続くことがあります。この梅雨の中休みを旧暦では「さつき晴れ」と言いました。つまり旧暦五月の梅雨を忘れさすような晴れ間が「さつき晴れ」さつきは皐月です。しかし現在では鯉のぼりが空を泳ぐ陽暦五月の青空を「さつき晴れ」に換わってしまいました。

六月下旬から七月上旬にかけて梅雨前線が本州上または沿岸海上に停滞して梅雨の最盛期になるのが第三期です。太平洋高気圧も段々勢力が強まり気温も上昇、湿度も高いので不快指数も急上昇、この時期には大雨の怖れもあります。

七月中旬には、太平洋高気圧がさらに勢力を増してきて梅雨前線を押し上げるので、前線は北上し、沖縄、九州の順に関東以西までは梅雨明け宣言がなされ本格的な夏到来となりますが関東地方以北では下旬まで梅雨明け宣言がずれ込むことが多いのです。

以上が梅雨の段階的な区分ですが、毎年同じような梅雨の型が繰り返される訳ではなく、その年によって雨の降り方にも変化があります。天気の変化が激しく、気温も高めに推移し、大雨が降ったり、強い日差しが射したりする傾向が強い梅雨を「陽性の梅雨」と呼んでいます。一方、雨の降り方はそれほど強くなく気温は低めに推移し、ぐずついた天気が続く傾向がある梅雨が「陰性の梅雨」と呼んでおります。ただし、梅雨全般にわたり陽性型、陰性型になるわけではなく、東日本では前半では陰性型、後半は陽性型ある傾向があり、西日本では全般的に陽性型になり易く、特に後半には台風の影響も現れ始めて大雨になることが多く注意が必要になります。

大雨の原因は、梅雨明けに近い頃には、太平洋高気圧が発達して日本付近まで張り出し、時計回りの吹き出しに乗って台風が接近するからです。さらにアジアモンスーンからの湿舌が南西から侵入してくることがあり、集中豪雨が襲い鉄砲水、河川の氾濫、地滑り、崖崩れ等の被害が毎年報じられます。

梅雨末期の豪雨

梅雨の末期頃になると大雨が降り易くなります。台風の接近、中国沿岸を經由してアジアモンスーンからの湿舌の侵入が重なり合うことが多くなり、猛烈な雨が降る傾向にあります。

大雨が予想される場合は大雨注意報や警報が発令されますが、それ以上の場合は豪雨警報や注意報の気象用語はなく、大量の雨が降って被害が発生したときに豪雨と言う単語を使用しておりました。更に‘集中豪雨’という用語がありますが、ある一定の狭い地域に短時間に大量の雨が降る現象を集中豪雨と言うと定義されております。この表現は昭和 28 年 8 月 15 日付けの朝日新聞が豪雨による水

害の記事の見出しに‘集中豪雨による水害’と報じたのが最初で新聞社の創作語でしたが、現象を的確に捉えた表現だということから気象用語として採用され、以後度々用いられるお馴染みの気象用語になっております。

典型的な梅雨末期の集中豪雨の例は昭和34年7月25日正午から夜半にかけて長崎県大村市、諫早市の地域を襲った集中豪雨は、24時間で1100mmを記録、1年分の雨量が1日で降り、地域全体が1m以上のプール状になり、更に被害を大きくしたのが満潮時と重なり潮が逆流したことです。犠牲者は死者、行方不明者739名、この時の恐怖が諫早湾の防潮堤建設を強行し、其の締めきりを巡って漁業、その他の利害関係者が対立、裁判沙汰や政治問題に発展しております。

更に昭和57年7月23日の夕方から真夜中にかけて長崎市を中心とした狭い地域に記録的な集中豪雨が襲ったのです。長崎市は三方を山で囲まれ、長崎湾に面し、市街地を中島川、滴上川という小さな川が流れる谷底にあるような市街地と山の中腹まで居住地があり、唄にある通りの坂の街です。其処へ僅か1晩で448mmの豪雨があったのです。

大体土砂降りの雨というのは20~30mm/hの降雨を表現し、それ以上はバケツをひっくり返したような雨となり、100mm/h前後で滝のような雨となります。

この時の雨は19時~20時にかけて187mmという驚異的な集中豪雨を観測し、我が国観測史上最大の降雨量を記録、まさに瀑布とも言うべき集中豪雨でした。

この時の被害も甚大で死者、行方不明者299名、流出、全半壊家屋1500棟でした。

集中豪雨は日本各地で起きる可能性がありますが、その殆どは七月中で梅雨末期に集中し、西日本で起きる頻度は高く、特に九州は要注意です。

この集中豪雨の原因を探ると‘湿舌’というあまり聴き馴れない気象用語に突き当たります。簡単に解説しますと、対流圏下層で、湿潤域が温度と水蒸気の移流に伴ってかなりの広さで舌状若しくはお带状に延びているところを湿舌という定義されております。

梅雨末期の大雨時には、東シナ海方面から日本列島上に大規模な湿舌が存在することが多い。次回は梅雨、湿舌に関する地球のメカニズムをお話ししましょう。



図1 集中豪雨の例(長崎豪雨)
昭和57年7月23日の日雨量分布図(ミリ)